

第7期生 卒業エッセイ

ふらふらっと。

第7期生 千葉 将太

「それ、ちばしょーぽい。」 たまに僕の隣の席のゲームオタクが言うセリフだ。「ちばしょーぽい」と言われて別段嫌な気はしないが、「ちばしょーぽさとはなんなのだろう」と、疑問に思う。彼曰く、ふらふらっとしていることらしい。現に三田祭でスンドゥブチゲを売る際にはあっちにふらふら、こっちにふらふらしていたことを例示され、「ああ、確かにな」と思った。と同時に、ではなぜふらふらするのだろうかという疑問が湧いてきた。振り返ってみると、1, 2年生のころもふらふらしていた。いろんなコンテストやら、サークルやらに顔を出していた。腰を据えたふりをしてみても、どこかふらふらしていた自分を自覚していたのだろう。そんな自分がかっこいいという思いがあり、小野ゼミの門を叩いたのだった。僕は小野ゼミに入って多くのことを学んだ。2年次には酷評されたプレゼンテーションも少しはまともになった。文章力も少しはついたはず？である。でも、このふらふらっという性質は変わらなかった。ただ、その原因らしきものにこの2年を通して気づけたという点で、この2年間は意義深い時間だったといえる。

そのふらふらの原因とは、自分が八方美人であるということである。誰に対してもいい顔をしようと思うから、自分が定まらない。基準が自分の外にあるのだ。右に左に、「これがいいかな、あれがいいかな。」と迷う。有識者の意見の代弁者たることが関の山で、自分で決断ができない。決断ができないと、リーダーにもなれない。仮に判断が成功を招いても、自分の基準で判断したわけじゃないから、何か物足りない…。ある人は、これを「背骨が育っていない」と形容する。背骨があれば、たとえ判断を間違っただとしても大抵のことなら動じなくなるらしい。そして、外の世界に自分の考えや思いを問うことが存在意義になるという（本書所収 白石 2011 を参照）。

人間はすぐには変わらない。昨日寝坊した自分はきっと今日も寝坊するだろうし、卒論の締切を守れなかった自分はこの文集も締切を守れなかった。ただ、改善は自覚することから始まる。小野ゼミは、自分が八方美人であり、背骨がないことを気付かせてくれた。幾多の壁にぶち当たらせ、グループワークでは自



フットサル大会にて(著者は前列右端)

分の無力さをひしひしと感じさせ、八方美人であろうとする試みを不可能にさせた。だからこそ、こんな自分の姿が見えてきた。自分を裸にするような壁を2年間絶えず与えてくれた小野ゼミに感謝したい。小野先生をはじめとして大学院生の方々、6期の先輩、同期、後輩、またOB・OGの方々、本当にありがとうございました。小野ゼミを通していろいろな発見ができ、充実した大学生活を過ごせました。こんな自分ですが、これからもよろしくお願ひします。機会があれば、一緒にフットサルしましょう！先輩だろうが、容赦なく削りにいきます 笑